

こころの言の葉

～第5集 優しさをあなたに～



平成19年度「こころの言の葉」コンクール作品集
鹿児島市教育委員会 編

は じ め に

鹿児島市教育委員会教育長 石踊 政昭

「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施された「こころの言の葉」コンクール。本年度の作品集、第五集をお届けいたします。

「こころの言の葉」コンクール、及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。この作品集には、中学生の子から保護者へあてたメッセージと、保護者から中学生の子にあてたメッセージが数十編掲載されています。どの作品も、日頃から気にかけている親や子に対する言葉にできない素直な思いを綴ったもので、読む者の心を揺さぶるものばかりです。数多くの「言の葉」の中には、自分と同じ「こころ」のメッセージを見出せるものもあるのではないかと思います。

「こころの言の葉」コンクールには、直接には口に出せない思いを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の心の交流を図り、お互いの存在について考えを深めるといふ趣旨があります。この作品集を皆さんで御愛読いただき、自分の親や子としての在り方について、あらためて認め合うとともに、これからの自分の生き方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、今回もすばらしい「言の葉」を寄せていただいた多くの皆さんに心から感謝の意を表し、はじめのことばといたします。

「こころの言の葉」の世界を十分に味わってください。

平成二十年一月

目次

「偽らざる思い」	・ ・ ・	中学生の子から親への言の葉	3
「思春期に向き合う」	・ ・ ・	親から中学生の子への言の葉	13
「優しさと厳しさ」	・ ・ ・	願いと感謝の言の葉	23
「心の葛藤」	・ ・ ・	揺れる思いの言の葉	35
平成十九年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧			44
審査員講評			45

「偽らざる思い」

—中学生の子から親への言の葉—



何のために生まれてきたんだろう

何のために生まれてきたんだろう。

いじめられる度にそう思う。

何のために生まれてきたんだろう。

失敗する度にそう思う。

落ち込む僕におとうさんがその答えを教えてください。

「いいところもあれば悪いところもある。それが人間だ。」

君はお父さんとお母さんの間で生まれたんだ。だから、

君はみんなのために生まれたんだよ。」

その答えを知った僕は思った。

「世界で一人しかない僕なんだ。みんなのためにもがんばって生きよう。」

この気持ちができきたのもお父さんのおかげです。

ありがとう、お父さん。



お母さんの夢

中学生になり、今後の進路や将来の夢について両親と話し合う機会が多くなった。自分自身の意志は、まだ漠然としていて、形にもならず固まってもいない。そんな僕に母が一言こう言った。

「お母さんの将来の夢は何だったと思う。」

「お母さんになりたかったんだよ。君が生まれてきてくれたから、お母さんになれたんだよ。君がお母さんの夢を叶えてくれたんだからすごいよね。」

何気なく言われた母の一言が、ぎゅっと胸に響いた。僕は自分の存在に責任を感じた。

これからの自分の生き方にも責任を感じた。

「僕はひとりだけで生きているんじゃないんだ。」

心の中のもやもやが晴れて気分が爽快になった気がした。今後の進路や将来の希望を考
えるとき、母の一言を思い出そう。それで僕はやる気と元気が湧いてくるだろうから。





誇り

パーパ、学校でよく「中国人!」「チャイニーズ!」と言われます。でもぼくは、そんなこと言われても平気です。ぼくは、パーパを誇りに思っています。中国も日本も大好きです。だから、完全な日本人にならなくてもかまいません。みんながあまりぼくを認めなくても家族に認めてもらえば、それで十分。みんなから悪口を言われるぐらい不幸とも思いません。

思い切り走れば、大空を見上げ鳥の声を聞ければ、そして何より生きていて家族がいればそれだけで幸せです!

一番難しいこと

話して伝えるより

書いて伝える方が簡単で

書いて伝えるより

心の中で思う方が簡単で

でも、気持ちは伝わらないと思う

感謝を表すことよりも

反抗する方が簡単で

反抗するよりも

自分が悪いと認める方が難しい

でも、反抗はしたくなる

だから、一番難しいことを

できるようにになりたい

「ありがとう」と伝えたい



口にできないけれど

学園の先生、ぼくが二歳の頃から十三歳までの十一年間、大切に育ててくれました。

いつもうるさくて、わがままで、すぐ物ばかり無くして、すぐに先生にばかり頼ってしまって、良いところなんて全然無いのに、優しく見守ってくれた。

「君の一番の良いところは正直で、真っ直ぐで、そして何より相手のことを考えてあげられるところ。」といつも何もしてあげられないぼくに言ってくれた。施設という苦しみや悲しみはいつももあるが、それを乗り越えて一回りも二回りも大きくなった自分を見てほしいと思う。悩み事を真剣に聞いてくれたり、いつも笑いを分けてくれる先生たちが大好きだ。

もしぼくが「いつもありがとう。」と言ったら最高に笑ってくれるだろうか。いつもは恥ずかしくて簡単に一回も口にできないけど、「ありがとう。」そして、これからも宜しく。





父の背中

男同士として、一番の相談相手のお父さん。ときどき話しかけてくれるけど、僕はなんかはずかしいというか、めんどくさいというか、無視することもある。だけど本当はうれしい。

友達には、親とほとんど話さない、話したくない人もいるけど、僕のお父さんは親子関係を大切にしているんだと思う。

ときどきお父さんはお母さんに注意されるけど、僕はそれをちゃんと聞いた方がいいと思う。言われるのがいやだのにげるのは僕もときどきしちゃうけど、お父さんがするのを見てよい気持ちにはなれなかった。人からアドバイスを受けたり人のよいところをまねして成長していくのは、親子も同じだと思う。

僕はまだまだこれからだけど、お父さんやいろんな大人のよいところを見つけて、まねして、よい大人になりたいな。

本当の幸せ

家族は大事。そんなことは分かっている。でも最近少し口を出されたり、おこられたりすると、すごくむかついて、時々叫び出したくなる。でもそれができないことが悔しくて泣いてしまう。できるだけ、気に入られたい、ほめられたいと思うと、空回りして失敗。失敗のくり返して、ドジな自分がきらいになる。

しっかりものの妹のようにちゃんとやりたい。そう一生懸命になると、自分じゃなくなっていた。

でも、やっぱり人の笑顔をみると幸せになれる。自分のために一生懸命になってるお母さんを見て、温かくなる。笑顔をふやしてあげたいと思う。

自分なりにがんばるから、幸せになってね。



母への苦言

お母さんは、はっきり言って自己中心的な考えだと思う。ウチは中学校に入ってから、ずっと言ってきたのに、全然なおそうとしないでしょ。人の話も最後まで聞いた方がいい。

ウチが思っていることを言うと、反抗期だからとか言ってシカトとかしないでよ。お母さんのために思っているのに、「きこえませーん」。

子供でもこんなこと言わないよ。でも、お母さんのおかげで学校に通っているのは感謝している。だから、少しずつ精神的に大人になってください。



自分の意見

私は、親を目の前にすると言いたいことを言うのに緊張してしまいます。

例えば、「塾に入りたい」とか、「部活を続けたい」とか。

反対されるのが怖くて、なかなか言えないことがたくさんあります。

私が「塾に入りたい」って言ったときも、前日からいつ言おうか、明日にしようか、ずっと悩んでいました。結局勇気を出して言っても、「だめ」の一言でかたづけられてしまいました。

私は、親に向かって自分の意見を言うのが、怖くなりました。だから、感じてほしいです。

私が何を考えているのか。どんな気持ちでいるのか。



「思春期に向き合う」

— 親から中学生の子への言の葉 —



いつでも、いつまでも

あなたが幼稚園の頃だった。担任の先生が話してくれた言葉を思い出す。

「おしゃべりをするか、給食を食べるか、どっちか一つにしなさい…
と言うと、箸を置いて話し続けていました。」

それほどおしゃべりな子供だったのに、いつの日か外ではとってもおとなしい子になっていた。

「自分のことを話すことよりね、人の話を聞いてあげることの方が大切なんだよ。」

最近のあなたは言う。そのくせ、家に帰ってくるなり、「あのねお母さん…。それでね…。だからね…。」自分のことばかり話し続ける。

「あのねお母さん…。」

いいよ、いつでも、いつまでも聞いてあげよう…。



受験生

「学校へ行きたくない。」と言ったのは、三年生になった五月のはじめ。もう歯車が狂い始めていたのに気付かなかった。今まで言ったことのない言葉にただただ怒り、焦り頭の中では「どうして、何があったの。」と叫んでいた。それから約三か月後、その理由がやっと分かった。小さく生まれたのが原因で、理解するのがとてもゆったりとのこと。三年生になり、急に受験生モードになり、ますます勉強が分からなくなり自分の居場所がない。つらかったんだね。

今、こうして生きている。笑っている。そして、少しずつ進路が見えてきた。生き生きとした目で笑っている。今までの十五年より、これからの人生が長いんだから。大丈夫だよ。これからは、自分のペースで歩いていけばいいんだから。急がず、あせらずにね。





後悔

「あなたには、パパもママもがっかりした。」

ひどい言葉だよね。ごめんね、そんなこと言って。あなたを傷つけるつもりはなかった。ただ、ただママは焦っていた。やせ細っていく娘を前に焦っていた。何か少しでも、一口でも食べて欲しくて。

どの本を読んでも心のストレス、特に母親との関係が原因と書いてある。涙が出た。だって、一生懸命育ててきたつもりだったから。いっぱい泣いて、いっぱい後悔した。ごめんね。あなたがテストで九十五点をとっても、なぜあと五点がとれないのと責めた。パパとママが仕事でいない時は、当たり前のように妹たちの面倒を頼んだ。しっかり者のあなたは学校でも皆から頼られた。そして忙しい日々。

疲れ切っていたあなたを抱きしめてあげればよかった。手を握ってあげればよかった。

ごめんね。絶対治してあげるからね。

がはは笑顔

「がはは」の笑い声、母ちゃんと兄ちゃんとの口げんか、音程の外れた歌、あまり、おもしろくないギャグ。もろ鹿児島弁での

「今日のゴキブリ騒動の話」。たまに聞こえる「プー」。君の「が

はは」を聞きながら飲む焼酎はともうまい。悩み、つらさがぜ

ーんぶ飛んでいく。「幸せだ」と毎晩思う。きつい時、君と家族のとぼけた顔を思い「きばら

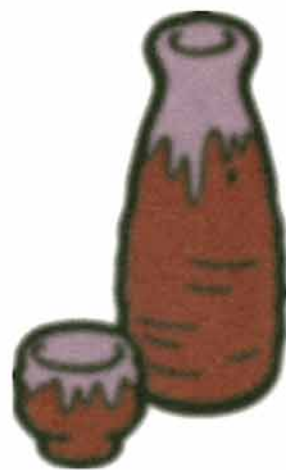
んなら」と踏んばれる。なぐんも文句なくし。あっ、じゃったあ。一つあった。父ちゃんは夏

の海が好きで、君とたくさんいけるように「千夏」と名付けたのに、「高校生になったら磯浜

へは一緒に行かないよ」。そりゃないよ。行こうよ。でも、まっいいか。ただ一つ、大好

きな君とその子供や世界中の人が「がはは笑顔」ですごせる地球であればいいなと父ちゃんは

思っています。



だいじょうぶ

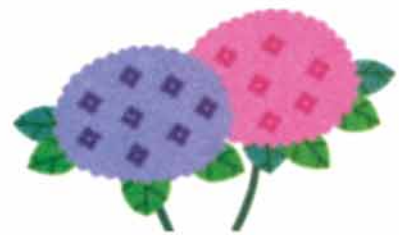
「大丈夫だよ、お母さん、今はそんな時なんだよ。」

あなたのお姉ちゃんが反抗期真っ只中、戸惑う私にあなたが言ってくれた

言葉です。今まで素直だったのにと悩み、力で押さえようとしていた私の肩の力がふうっと抜けました。そうか、だれもが一度は通る道だよね。わが娘にもそんな時がきたのか。そう笑って思えるようになりました。

あれから数年経ち、あなたにもそんな時がきましたね。反抗期と呼ぶのも恥ずかしいくらいの可愛いものでした。プイツと横を向いても「だいじょうぶだからね。」とあなたの声が聞こえてきました。だから静かに見守れたのかもしれない。

ありがとう。これからも笑っていこうね。



娘の一言

私は、毎日晩酌をします。娘が小さい頃はよくお酌をしてくれていま

した。その娘が中学生になり世間並みに父親「私」をさけるようになり

ました。私としてはコミュニケーションを図ろうと必死に話しかけます

が、ことごとく失敗します。この情けない父親「私」が資格取得のために勉強しようとして計画を

立て、毎日楽しみの晩酌も週二回に減らし、今現在実行中です。この私の姿を見た娘が「今日

もお酒を飲まないの。」と話しかけてきます。励ましの言葉ではないですが、父親として嬉し

い一言でした。いかにしてコミュニケーションを図ろうかと毎日のように考えていましたが、

こんなことでコミュニケーションが図れるとは思ってもいない、本当に嬉しい出来事でした。



ほんの一時

「うるさいなあ」「何か」「疲れた」「おなかですいた。夕飯何」毎日あなたが言う言葉です。一日一回は、あなたの机の横に行き、顔を見ながら話をしたいと思っています。クラスのこと、部活動のこと、ささいな小さな出来事でもいいのです。

ほんの数分、あなたと話をすることが楽しみなのですよ。「うるさいし、めんどくさい」かもしれないけれど、話をしようよ。中学二年生になって、一年生の時よりも、毎日いろいろなことがあり、考えることも多くなってきているでしょう。日常の話でも、悩んでいることでも、わからないことでも、何でも話をしよう。お父さんもお母さんも、あなたと話をすることが嬉しいですよ。今夜もまた、あなたの顔を見ながら話をしにいこうよ。ほんの一時、話をしようね。



息子よ！

「うるさい！ ボケ！ ババア！」

息子のこのセリフは、朝の一幕に必ずと言っていいほど出てくる。

最近では寝言に出てくる始末だ。

そんなに私はうざい存在なのか？

しかしあるとき夫が「おまえの姿が少し見えないだけで『お母さんは』と

探しているぞ。」「お母さんがいないと寂しいのか？」「うん」

こんなやりとりがあったそうだ。

気持ちが悪われた私は心に決めた。

これからも身体を張って受けて立つぞ！

なんたって、大事な大事な可愛い可愛い息子なんだから。

いとおいしい君へ

「パパと結婚する。」と言っていたのはいつまでだっただろうか。そのせいなのか男の趣味がいまいちだ。 すまん。

大好きなうどんをめまいがするほどふーふーと冷ましていたのはいつまでだったのだろうか。そのせいなのか君は猫舌だ。 すまん。

でも、そんな君の姿が父はとてもいとおいしい。

これから幾度の困難にぶちあたることだろう。

そんな時、だまって大きな壁になり君を守る。

だから君は自分の道を歩んでほしい。



「優しさと厳しさ」

— 願いと感謝の言の葉 —



二人の声

直接言うのは照れくさいな。だからこの場をかりて言おう。お父さん、お母さん、いつもありがとう。二人には誰よりも感謝している。

二人とも、もう忘れてしまったかもしれないけど、私が中学一年生だったあの夜、私は涙が止まらずに一人で泣いたことがあった。勉強や部活でうまくいかないこと、人に私の性格がきついと言われたことから自分が嫌になって泣いたんだ。そんな私を見て二人は優しく励ますのではなく、「お前は死ぬほどの努力をして泣いているのか。もしそうでないのなら精一杯努力してから泣け。」と厳しく叱った。正直びっくりしたけど、もしあの言葉をかけてくれなかったら、私は挫折していたと思う。二人の声は私を奮い立たせてくれた。これからも二人の声がある限り私は頑張るから。



負けられません

天真爛漫、そのなんとも言えないかわいい笑顔に癒されるひととき。トイレの壁の十数年前のかわいい写真。

ところが今日も朝から押し問答。いよいよ訪れた息子の思春期は、まるで台風で荒れる海。成長の証というものの、攻撃的な顔と憎たらしいあの態度に無性に腹が立つ。

でも会話したくて、ときどきこちらからけしかける。案の定予想どおりの返事。思った以上の手応えに、ほくそ笑むわたし。

やりとりがエスカレートした次の日は、心が痛む。
一生懸命素直になろうとするから。「しかたない。」と言いながら、やってくれるから。いっぱい後悔したんだ。一人で悩んだんだ。素直になれないことはいらいらしたんだ。わかっているよ。全部わかっているよ。でも負けられない。まだ負けられない。おまえの寝顔とお母さんの気持ちはずっと同じだから。何があっても変わらないから。



くもの巣

「ありがとう」「ごめんね」って意外と言いくらい。僕は、家族と話す時間が少ない。なのに、一度話すと、ケンカをしてしまう。

「おはよう」という母の声にぶっきらぼうに答えてしまい、けんかした。目覚めが悪かったのか、気分が悪かった。それから、会う度に「ごめんなさい」と言おう、言おうと思っても言えない。僕の心の中にはくもが住んでいて、大きな巣を作っているのかもしれない。そのくもの巣が、「ごめんね」という言葉をつかまえて、こわしてるかもしれない。そうだとしたら、どうにかして、くもの巣をこわしたい。そして、母に「ごめんなさい」と言いたいと思った。それでも、もっと嫌なことを言ってしまおう。本当は、とっても感謝しているのに。本当は、もっと別のことを言いたいのに。



贈る言葉

あなたを見てると、春の俳句が浮かんできます。「春の海ひねもすのたり
のたりかな」と。終日というよりは、年中のどかすぎます。少しは危機感を
持ったらどうですかというものの、競い合ったり、目立ったりすることな
ど好まないあなたを見ていると、その方があなたらしいと思ったりもします。



少しずつ周りの状況の変化に気付き、精神的にも成長するときがきたら、「春風や闘志いだ
きて丘にたつ」という俳句のように、春疾風のような強い風が吹いても、闘志を一層燃やし発
奮して欲しいです。一年後には、すでに受験生と呼ばれ、顔色を変えて、寝る間も惜しんで勉
強するあなたを想像すると、少し滑稽です。一年後のあなたに、この俳句を贈ります。
「受験生春を忘れて道に立つ」。どうか心して受け取って下さいませ。

家庭の構図

「出たあ！ 妖怪グチグチババア！」

と父が言い、すかさず母が、

「もう。ババアじゃなくて、お嬢さんです。」

険しかった母の顔から笑みがこぼれ、ぴーんと張りつめた空気を父の一言が壊してくれます。

こうやって、父がいつも助け船を出してくれるので、私は父が大好きです。

しばらくしてから、父はなぜ母が怒ったのか、次にどうすれば良いのか諭すように教えてくださいます。

思えば、我が家は母が叱り、父が私をなぐさめるといふ構図が成り立っている気がします。そんな両親のもとに生まれ、育てられ、心より感謝しています。

そして、何があっても絶対に守ってくれる大きな愛で包んでくれているからこそ、今日も元気で頑張れます。



笑顔

おい、息子よ。

今を精一杯生きているか。

あつという間に親父の俺を越していった身長。

スラリと伸びた足に外で見せる笑顔。

さすがの俺もその笑顔には敵わない。

でも家では見せないよな。たまに母さんにも向けたら喜ぶだろうな。

大好きなんだろう。

そして真に笑顔の似合う男になれ。



ねえ、聞いて

お母さん、私はできる限り精一杯勉強や部活を頑張っているよ。けれど、お母さんは、私の悪いところばかり見ているね。私はみんなが仕事に行って留守番している時だから、気付かないのも当たり前かもしれないけど、その時に勉強頑張っているんだよ。でも、その結果がテストに出ないから、私がいけないのかもしれない。だけど、それで怒られてばかりいると、逆にやる気失せるんだよね。たまには私をほめてほしい。話もほとんど受け流されて、私だってお母さんに相談したら、アドバイスとかしてほしいし、面白い会話もしたい。仕事で疲れているのは分かるけど、ちゃんと私を見てほしい。お母さんのその目でしっかりと見てほしいから。体の中の毒を全てはき出したい。だから、私の話を聞いて、お母さん。



大人の宿題

大人になるとテストや宿題がなくなり、楽だと思っていました。ところが、子供が生まれ、子育てが始まると、いろいろな問題にぶつかります。

まずは、言葉が話せず、子供の様子で思いを感じ取らなければならず、これも、なかなか難問でした。また、少し大きくなったら、あいさつや後片付けなどの「しつけ」をしなければなりません。これが、簡単にはできず、いろいろな工夫が必要でした。さらに成長し、自分で考え、判断・行動できるようになったと思っていると、心の成長に必要な反抗期や友達とのトラブルなど、難問です。

親には、先生や教科書はありませんが、子供のことで日々、課題が与えられます。自分の親や先輩の話、本を参考として、問題にトライします。正解なのか不安になりますが、子供たちの笑顔を見ると、良かったのかなあと、また次の問題へと。



大切な言葉

私は、お父さんに会える日が年に一回しかない。私はお母さんがいない。

お母さんを恋しく思ったことはない。お父さんや学園のみんながいるからだ。でも

私は、大切な言葉を忘れている。「ありがとう」と「ごめんなさい」は恥ずかしいからではない。「ありがとう」と言ったって、意味がないと思っていたからだ。大切な言葉が言えない。

ある日お父さんが、私たちのためにがんばっていることを聞いた。私は「へえ、そうなんだ」としか思わなかった。私は自分の心にうそはつけない。でもある日、私はお父さんの仕事場に行った。お父さんが汗水たらしながらがんばっている。その時思った。「ありがとうお父さん」そう口に出したかった。でも出せなかった。それでも、お父さんに届いていると思う。



お母さんって偉い

「お母さんって偉いよ。」

二泊三日の出張先から自宅へ電話を入れてみたら、開口一番の娘の一言。

私が留守の間、料理は長女に、洗い物を彼女にお願いしていたのだ。

「お茶碗洗うでしょ、お鍋を磨くでしょ、生ゴミを片付けるでしょ、一日やっただけですごく疲れちゃった。そのうえ料理や洗濯まで、毎日仕事から帰ってきてやっているんだもん。お母さんて、偉いねえ。なんでソファでうとうとしているんだろうと思っただけ、眠くなるよ、当然だよ。」

出張から帰ってみたら、思いがけないプレゼントが待っていた。ぴかぴかに磨き上げられた台所。感謝の気持ちを込めてみましたって。

娘よ、ありがとう。優しい子に育ってくれて。



私を見ていて

逃げたい。今すぐ、この場所から。この縛られた環境から。この家族から。そう、本気で思った。

私がおかするたびに、毎日同じようなことを言ってくる。

「頭が悪くなったでしょう。勉強しないからね。」

「部屋はいつ片付けるの？」

私も、がんばっているんだよ。いい子でいられるように、自分なりに一生懸命なんだよ。何で気付いてくれないの。でも、それでも怒られ続けている自分も、同じように大嫌いなんだ。

お母さん、これから私が自分を好きになるようにするために、お願いがあるんだ。それは、私の変化を見ること。私が、本当の自分を見失わないように。



「心の葛藤」

—揺れる思いの言の葉—



疑問

うちはうち

よそはよそ

というときもあれば

他の子はみんな：

とよその子の話をするときもある

結局あなたは私に何を

望んでいるのですか

自分を信じたい

限界はある 誰にだってね

わかってるよ そんなこと

けどね 今は自分を信じたいんだ

超えなくてもいい

見てみたいんだ

だから少し見てて

逃げたくないんだ

限界は自分で決めるんじゃないから

娘へ

頑張ってるな…と思っているのよ。

部活、生徒会、応援団、そしてクラスのこと。

常に一生懸命なあなたを

誰よりも一番近くで見ているから。

偉いなあ、さすがだなあと思ってるのよ。

なのに、つい、

「もっと、もっと…。」

と言ってしまうのよね。

あなたに、ずっと輝き続けて欲しいから。

ごめん、欲張りな母を許してね。

息子

「ちゃん」をつけて呼ぶ頃。

「君」をつけて呼ぶ頃。

呼び捨てで呼ぶ頃。

「は〜い」と可愛く返事する頃。

「はい」と規律正しく返事する頃。

「・・・」返事のない今。

自ら学ぶ楽しみを知る頃。

拘束され、涙を流し学ぶ頃。

「分かってる。」を連発する今。

夫婦の会話、分からず無邪気に遊ぶ頃。

夫婦の大きな声で、急によい子になる頃。

夫婦バトルに、肩を叩き冷静さを教えてくれる今。

母になった喜びを噛み締める頃。

子育てのマニュアルを探す頃。

反抗も立派な成長と理解する今。

そのままでもいいんだよ

「私って何だろう、私って人からどう思われているの。」

友達の言葉をまねしてみた。

友達の口調をまねしてみた。

友達の行動をまねしてみた。

でも、何かが違う。私は私を失った。

母は私に気付いてくれた。優しくしてくれた。
た。

家族みんなで慰めてくれた。

「そのままでもいいんだよ。」それから私は変わった。

みんなにありがとう。

いつも不安だった

「ただいま」っていうと、「おかえり」って返ってくる。

でもそれは母ではない。

いつも祖母の声だった。心は闇の中にいた。

母がちゃんとわたしの目を見る時、それは

おこる時だけ、そう思ってた。

だからおこられていても、うれしかった。

ほんの少しだけど、わざとおこられる事

しようと思った時もあった。

でも、本当はやさしい瞳で見えてほし

かった。

「いってらっしゃい」

あなたの何気ないひとことで、ドキッとさせられました。

「お母さんのいってらっしゃいの声が聞こえないとなんだかその日一日不安なんだ…。」

本当に何気ないひとことでした。私を責めている口調でもなく、怒っているわけでもありません。でも、私の心の中に重くつきささりました。

朝の慌ただしい時間の中、台所だったり洗面所だったり、時には二階で身支度を整えていたり、応えていたのに聞こえてなかったりしたのですね。

あなたの一日の始まりが私の声で決まるのなら、心を込めて応えます。

「いってらっしゃい。」の言葉にありったけの愛を。

ありがとう

「お母さん今日のご飯を何合炊けばいい。」

夕方電話が入る。帰りの遅い私の代わりにご飯を炊いてくれるようになった。

「明日は何のゴミ出しだっけ。」

毎朝眠い目をこすりながら、ゴミを出してくるようになった。ゴミ出しに行くその後ろ姿を見ていると胸が熱くなる。

たくさん叱ったのに、

「お母さん、仕事で疲れているのにいろいろ心配かけてごめんね。はい。」

差し出したその手に、大事に大事に貯めた自分のお小遣いで買ってきたプリン。心優しく温かいあなた…。いつの間にか、すっかり成長し、遅しくなった。ふと気付くと、あなたが私を支えてくれている。いつもありがとう。そして、心から「大好きだよ。」

いつもの笑顔

お願いだから、ケンカしないで。

普段仲のいい二人だから、ケンカしたときは胸が苦しくなって、いつもトイレで泣いているんだよ。ケンカするたびに、もう終わってしまうのかなって思うよ。ケンカするほど仲がいいって言うけど、やっぱりケンカはだめだよ。

ケンカして二人とも苦しいっていうのは、痛いほど分かる。でも、苦しい時こそ、力を合わせて頑張っていくのが家族でしょ。だから苦しい時は、ためこまずに言ってね。そして、私にいつもの笑顔を見せてね。

私は、仲よく笑っている二人が大好きだよ。

ごめんなさい

事故でお母さんを亡くしたわたし。いつも明るくしてたけど、本当はすごくさびしかった。

今は新しいお母さんがいる。よくケンカしたり、おこられたりしたとき、本当の親なんかじゃないくせになって、よく思っていた。時には声に出して言って傷つけてしまったこともあった。でも本当は、自分のお母さんだって認めてるんだよ。血のつながりがなくても、認めていた。でも、てれくさくて、言えなかった。

認めていないって思ってるかもしれないけど、本当は認めている。それだけはわかって欲しい。それと今まで声に出して、本当の親じゃないくせになって言ってごめんなさい。血のつながりはないけれど、これからもわたしのお母さんでいてください。

頼もしいあなたへ

大切な受験の時期に、お父さんが突然、大変な病気になってしまい、あなたには大変な思いをさせてしまいましたね。勉強に部活に家の手伝い、とても良くやってくれました。病院から帰って来ると、肩や背中をマッサージしてくれてありがとう。お父さんの病院に行っては、部活の話を手振り手振りでお父さんに語ってくれたあなた。その姿を、毎日抗ガン剤治療で、辛いはずのお父さんが嬉しそうに聞いている。お父さんを見て涙が止まりませんでした。まだまだ子供だと思っていたあなたが、ずいぶんと大人に見え、とても頼もしく映りました。あなたが野球ボールに書いたメッセージ、今日もお父さんの手にしっかりとにぎられています。ありがとう。

あなたが大好き

今年であなたは十三歳。そしてお兄ちゃんのお十三回忌。あなたが産まれて四日目に、お兄ちゃんが亡くなって、あなたに笑顔をいっぱいあげられなくて、ごめんね。おっぱいをいっぱいあげられなくて、ごめんね。いっぱい抱っこもしてあげられなくて、ごめんね。産まれたばかりの可愛い赤ちゃんのあなたの顔を思い出せなくて、悔やまれている。ごめんね。

喜びと悲しみのなかで成長したあなたが言った。「私のお母さんが、お母さんでよかった。」気がつく私はいつもあなたのやさしさに支えられている。こんな「ごめんね」が、いっぱいのお母さんだけど、これからは「お母さんでよかった。」って、言ってもらえるように頑張ろうかな。

働く意味

私が「なんで働いとうの。」って聞いた
ら、お母さん「あんたらのためやで。」っ
て言ってくれたんやなあ。「なんであたし
らのために働いとんの。」ってまた聞いた
ら、「もちろんあんたらが私の一番の宝物
やからよ。」っていつてくれたよな。お母
さんの気持ち聞いてあたしもがんばらんと、
と思えたねん。ありがとう。
私もお母さんが世界で一番好きやで！

心の中

お母さん、私は何？
お母さんが、「いい高校へ行って、いい
大学にも行って、いい職業につけば、良い
ことばかりだよ。」って言ってるけど、な
んで、そう決めつけるの？
良い高校へ行って、良いことばかりとは
限らないんだよ。私のために言ってくれて
るって事はわかってる。でも、つらい時も
あるよ。お母さん、気付いてる？
私ね、頭だけの人間にはなりたくない。
自分の人生だよ。自分で決める。失敗する
こともある。でも、それもいい経験だから。
そういうところも含めて、あたたかく見守
っていてください。

素直な君へ

「いつも俺…」

何かが起こると決まって叱られる彼が言う
台詞。

「またやっちゃったかな…」

彼が言い訳する間もないくらいの勢いで叱
った後の私の心の呟き。

姉や妹に比べ、声も大きいし、やること
も大きい。そのために、悪くもないのに叱
られ続けて十数年。気を静めて話を聞いて
みると、彼は無実だったことが多々あった。
それでも、ひねくれもせず、素直に育って
くれた。ありがとう。

普段言ったことはないけど、君がやさし
い心を持っていることは、家族みんながわ
かっているよ。これから、心も身体も大き
く成長していくけど、素直でやさしい所は
ずっと変わらずにいてね。

抱きしめたい

ぱっと見、全然似てないけど、ご飯の食
べ方が似てるねって言われたり、おどろき
方がお兄ちゃんにそっくりだねって言われ
たり、おもしろいね、かくしていても親子
だね。抱きつかれて、嫌そうな顔をするの
もわかるけど、お父さんもお母さんも言葉
にするより先に、どうしようもなく「ムギ
ユツ」としたくなるのよね。

平成19年度「こころの言の葉」コンクール 入賞者一覧

大 賞

中学生の部	親 の 部
樋之口 俊 一	馬場口 麻里子

準大賞

中学生の部	親 の 部
諸 留 奈 実	前 田 修
伊地知 周 作	山 田 晴 美

優秀賞

中学生の部	親 の 部
豊 重 優 希	吉 留 康 子
本 村 理 菜	茶 圓 泉
折 田 拓 哉	久木野 由香里
吉 川 真 由	宮之前 一 清
馬場添 龍 聖	佐々木 春 美
尾 松 正	大 島 早 苗
福 留 慶	宮 下 純一郎

入 選

中学生の部	親 の 部
東 静 華	境 田 初 美
今 田 裕 稀	鵜 木 奈緒美
酒 匂 愁	品 川 里 香
上 村 桃 華	増 尾 哲 志
水 田 保 希	末 吉 みちる
久保田 恵梨子	永井野 弘 江
牛 堀 優 香	平 田 章 子
石 村 夏 美	石 元 優 子
惣 津 春 菜	嶋 崎 加与子
溝 工	宮 下 利 子
富ヶ原 美 優	高 崎 さゆり
村 中 喜 絵	大久保 千恵美
中 間 なつき	応募総数:12,591点

審査員講評

審査委員長

千々岩弘一先生

中学生もその保護者も、誰もが皆、「今生懸命に」生きていく。保護者の前で陽気に笑う中学生も、中学生の前で頼もしい振舞う保護者も、その内面は「今生懸命に生きていく」に違いない。人は、誰でも失敗なしに、つまづくことなしに生きていくはずがない。時には「死」を真剣に考える瞬間があるかもしれない。それでも、「今生懸命に」生きられるのは、自分のことを本気で大切に思ってくれる家族に支えられているからだ。家族の存在は、かけがえのないものだ。ただ、そんな家族だからこそ、感情のもつれや誤解は、言葉にしなければ解決できない。しかし、言葉にするきっかけは見つけにくい。一歩踏み出せば、家族なら分かり合える。その一歩を後押しする契機が、「一葉のはがき」でありこの「作品集」であればいいと願っている。

保護者の応募は足踏み状態ながら、中学生の応募は着実に増え、市内全中学生の三分の二となった。各学校の取り組みに感謝したい。また、本「作品集」への関心も着実に高まってきている。鹿児島市民・県民が、様々な機会に話題にしてくださいというだけでなく、全国各地から参考にしたという要請もいただいている。五回目を迎えた本コンクールだが、その社会的意義・価値は確実に高まっている。

鹿児島国際大学教授

坂尾加代子先生

様々な思いを込めて綴られた「こころの言葉」。一つ一つの作品に、心を寄り添わせ大切に読ませていただきました。

慈愛に満ちあふれた親からのメッセージや、心温まる親子関係の様子は読み手にまで幸せを運んでくれました。一方、思春期の子どもには重すぎる様々な難題を抱えた家庭環境の中で、心に折り合いをつけながら懸命に前向きに生きていく子どもたちも少なくなく、その姿に胸が熱くなりました。また、「子どもは、親や家族に支えられていることに気付いた時、感謝の心が生まれ自信へとつながって、様々な困難を乗り越える力が湧いてくる」ということを実感し、改めて、親としての在り方の重要さを感じました。

全体を通して、親も子も、お互いの存在の大切さに気付いていながら、充分には心が通じ合っていない状況に「本音でもっと語りた……」と強く願っていることを痛感しています。

時間に追われながらの現代生活の中、私たちは、大切なものを見失いがちです。自分探しを始めた時期にいる子どもたちが大切なものを見失うことがないように、子どもの心にしつかり耳を傾け、親と子がゆっくりと語り合う時をたくさん持つてほしいと願っています。

市「さつまっ子」育成市民会議副委員長

海江田由加先生

相思相愛、でも互いの気持ちとうまく伝え合えない恋人同士。親子それぞれの「言葉」を読みながら、そんな姿が思い浮かびました。

どちらも相手のことが大好きで、なんとか役にたきたい、期待に応えたいと思っている。でもその手法や、ふだん出てくる言葉は、気持ちと裏腹だったり、ときには自分の思いだけを押しつけることになってしまったりで、後悔することも少なくありません。親子って、いつの時代もそうなんだろうと思います。

それでも、思いが通じ合う瞬間があります。両者をつなぐのは「ありがとう」の一言や、つらい時期にそつと差し出してくれた手、毎日繰り返す「行ってらっしゃい」「ただいま」の会話などです。言の葉作品に現れるその瞬間は温かく、確かな信頼関係があることを感じさせてくれました。その一瞬があるからこそ、親子げんかを繰り返しながらも、また次の心の触れ合う瞬間を待つのでしょうか。

親子の絆を再確認した一方で、中学生の文章に、親の極端な無関心の中にあつて、強い SOS を送っていると感じるものがありました。分かってくれる人が一人でもいれば、救われることがあります。親でなくても構いません。周りの大人は「言の葉」を通じて届いたこの信号を見逃さないでほしいと願っています。

南日本新聞社編集委員

山元一八先生

五年目を迎えた本コンクールの応募作品、中学生約一万二千点、保護者約八百点の「言の葉」を拝読・審査しながら一つの文章と一首の和歌を思い出していた。それは、

「おまえはゆうきのあるこどもだったんだからな。じぶんでじぶんをよわむしだなんておもうな。にんげんやさしささえあれば、やらなきゃならねえことはきつとやるもんだ。」

(小学校国語教材「モチモチの木」)

「銀も黄金も玉も何せむに勝れる宝子に如かめやも」(「万葉集」山上憶良)

青少年の事件・事故や保護者や大人の「子育て」に関する事件・事故が増大・凶悪化し、大きな社会問題になっている中で、全ての応募作品が涙なくしては読めない心の叫びやつぶやきであった。

思春期であるが故に「てらい」と「恥じらい」の中で寡黙になりつつも、心の内で「ありがとう」と絶叫している本市の中学生諸君の「やさしさ」がひしひしと伝わってくるのである。また、「子は宝である」という、昔から未来永劫変わらない「親の思い」と「決意」と「覚悟」があふれ出ている。まさに珠玉の「言の葉」であると思う。

本誌が、学校では教科指導・道徳等で活用され、家庭では親子の会話の一助として活用され、「やさしさ」が一層広がり深まることを心から期待したい。

元公民館長

遠矢仁司先生

五年目を数えるこのコンクールに、今年も審査委員として携わることができました。そして応募された、たくさんの「こころの言の葉」との再会に、また胸を熱くさせられ、心の琴線に触れながらの選考になりました。いつもは面と向かつては言えないことだからこそ重みもあり、心に響くそれぞれの言の葉は、どれもが賞に値するもので、審査も困難を極めました。

家族のつながりや絆が希薄化しているとも言われる今日ですが、思春期を迎えた子どもたちは、心の葛藤を抱きながらも、心の奥底にある真情は、絆の深さや思いやりの心をしつかりと捉えているのではないのでしょうか。このことを理解して子どもと接し、いつもと違う所作や言動に気づいて声をかけているのだらうかと自責の念にかられます。厳しい中にも子どもの良き相談相手になりたいものです。

中学生のみなさんは、これからも幾度となくぶち当たる苦難を一つずつ乗り越えて欲しいと思います。そして、今は透明で見えないかもしれない幸せを、いつかきつと見つけ出して欲しいと願っています。

市PTA連合会会長

わたしからの「こころの言の葉」

子から親へ・親から子へ

こころの言の葉

～第5集 優しさをあなたに～

平成20年2月8日

発行 鹿児島市教育委員会
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1
TEL (099) 227-1941 FAX (099) 227-1923

